

## コラム

## 日本橋南はドイツ風吹かず

明治の一時期、東京では「日本橋南はドイツ風吹かず」といった川柳のようなものが流行ったことがあった。

日本の医学は、明治4年(1871)に東大がドイツ人教師を招いて医学教育をはじめたことで大きく前進したが、この大学を手本にして全国にそのコピーをつくっていったため、当時の学理中心のドイツ医学が全国を風靡することになった。

東京でも日本橋の北側では、その東大を中心に陸軍軍医学校や大病院の順天堂病院や医学校の済生学舎などがドイツ風を吹き、そこではドイツ語をつかう医者が大きく幅を利かせていた。そんな中であって日本橋の南側にはそのようなドイツ風が吹かず、代わりに英国風とでもいうべき患者中心の医風が吹いていたというのである。

たしかに日本橋の南側では、高木兼寛をはじめ英国医学を学んだ多くの海軍軍医が高輪の東京海軍病院(院長・高木)や芝公園の海軍軍医学校(校長・高木)に勤務し、その近辺(芝、麻布、銀座など)に居住、開業していたし、また彼らの多くは高木のつくった芝愛宕町の慈恵医学校や慈恵病院(慈善病院)で活躍していたのである。さらに英学熟にはじまる福沢諭吉の慶応義塾が三田に居を構えていたのもその感を一層強くしたであろう。

高木の英国医学の勉学は、まず英医・ウィリスへの師事、ついで英医・アンダーソンへの師事、さらに英国セント・トーマス病院医学校での履修で一応終るわけであるが、彼が英国医学の特徴やその力を本当に体得したのは、むしろ帰国してからの脚気の研究ではなかったかと思われる。彼は英国流の実証的な疫学的研究方法によっ

て、脚気の原因が栄養の欠陥にあることを発見できたのである（栄養欠陥説）。

当時、脚気はまだ原因不明の疾患であったが、そのころの日本医学全体をリードしていたドイツ医学派は、それは細菌による伝染病に違いないとしていた（伝染病説）、そのため両学説ははげしく争うことになった（脚気論争として知られる）。高木ははじめドイツ医学派の思弁的な学理主義にずいぶん苦勞させられたが、けっきょく英国流の実証主義によって完全に勝利することができた。食餌を改善することによって完全に脚気を予防、治療することに成功したのである。彼はその成果を多くの英文論文（成医会雑誌英文誌）にして国外にも発表した（彼が国内より国際的に有名なのはそのためである）。

慈恵医学校が専門学校に昇格したとき（明治36年）、高木は文部省に、外国語履修をドイツ語でなく英語だけにする理由をこう説明している。「国内用の医師をつくるにはドイツ語でも可能であるが、国際的な医師をつくるには英語のほうがはるかに適している」と。そして学生にたいしても「英語は世界語であるから、まずこれを習熟せねばならぬ。ドイツ語の優れた業績も直ちに英訳されるから、英語のほかにドイツ語を学ぶ必要はない」と説明した。慈恵医学校が後々まで「わが国唯一の英国流の医育機関」として有名になったのはそのためである。

高木の英国流医学にたいする絶大な信頼は生涯くずれずにはなかった。教員の留学先もちろん英（米）に決まっていた。晩年、永山武美（生化学教授）が留学するときにも、永山が「どうかドイツの方にもやっていただきたいのですが」と願うと、「ドイツに行きたいのなら自費で行け」と怒鳴られたという。

第二次大戦後、米（英）医学がドイツ医学にかわって全国に広がっ

た現状を、もし高木が眺めたらどうであろう、面食らってしばらく言葉を失うのではないだろうか。